

多様な コミュニケーションの 機会をデザインする 高校事例

実際に使うことなくして、コミュニケーションの力は磨かれません。
授業や特別活動の工夫、あるいは教師の関わり方を変えることで、
生徒が多様なコミュニケーションの力を
発揮する機会を創り出している事例を紹介します。

CASE

1

なかじょう
中条高校
(新潟・県立)

CASE

2

海城中学高校
(東京・私立)

CASE

3

天草高校倉岳校
(熊本・県立)

CASE

4

刈谷東高校
(愛知・県立)

CASE
1

地域と協働して「場数を踏む」機会を多数設け、意欲と自信につなげる

なかじょう
中条高校
(新潟・県立)

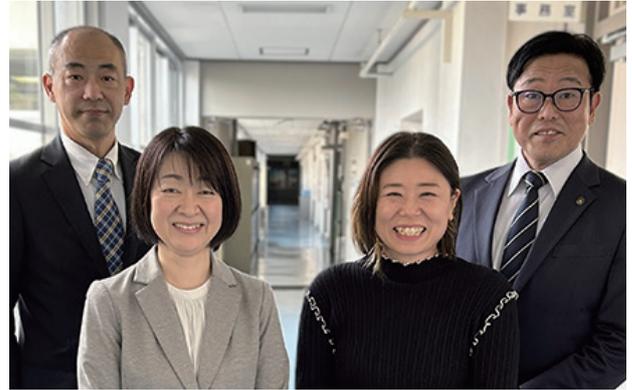
1910年創立／普通科総合選択制(探究教養コース・地域産業コース)／生徒数126人(男子82人・女子44人)／地域と連携した探究活動等により、第13回キャリア教育推進連携表彰(文部科学省・経済産業省)奨励賞を受賞。

トークフォークダンスや 小中学校での読み聞かせを導入

新潟県胎内市内唯一の公立高校である中条高校には、多様な生徒が入学する。素直さの一方で、コミュニケーションへの苦手意識や自信のなさがうかがえる生徒も少なくない。校長の横堀正晴先生は3年前の着任当初について、「生徒が学校を楽しんでいる様子があまり感じられなかった」と振り返る。そこから「イノベーション」を掲げ、「やれることは片っ端から取り組んできた」と言う。

イノベーションのポイントの一つは、生徒が多様な人と関わる機会を大幅に増やしたこと。その代表的な活動が、生徒と地域住民が短時間の対話を繰り返すトークフォークダンスだ。地域探究に向かう準備として、今年度から1・2年生を対象に始めた。当日は、生徒約80人に対し、幅広い年代の大人が84人集まった。ペアを替えながら、自己紹介、将来の目標、地域の課題や未来まで、お互いの考えを交換していく。会場には終始、笑顔と熱気があふれていた。

「多くの生徒が、コミュニケーション能力とはうまく話すことだと思い込み、『自分は苦手』と言います。しかし、そうではなく、相手の話を聞いて理解する力こそ重要です。お互いが理解しようとすることでコミ



写真左から教務主任・保坂和洋先生、本間由紀先生、中川千恵先生、校長・横堀正晴先生。

ュニケーションが深まる。そのことを実感する機会になったのではないのでしょうか」(教務主任・保坂和洋先生)

この成功を受け、手法を異学年交流にも応用。探究活動で学んだことをテーマに、1年生と3年生がトークフォークダンスを実施した。年度末には、同様に将来の目標や合格体験を話し合う予定だ。

「3年生には『思い切り“先輩面”して話していい』と伝えています。学年を横断する取組が少ないなか、自らの経験を誇る場にしてほしい」(保坂先生)

また、課外では、希望者を募り、近隣の小中学校での読み聞かせを始めた。読み聞かせには技術が要するため、事前指導を行い、何度も練習して臨む。

「最初は緊張で固くなっているけど、小学生や中学生に歓迎され、最後は感謝の言葉をもらい、達成感に満ちた笑顔で帰ってきます」(横堀先生)

このほか、探究活動や教科学習の延長で、県内および県外の高校との交流企画、外部コンテストへの参加など、新しい出会いや人前に出ていく機会を多数設定。結果、無口な生徒が学校代表として発表を行うなど、幅広い生徒に活躍の場が広がっている。

「人と関わるのが苦手な生徒たちも、場数を踏むなかで一歩ずつ前へ進んでいる。自信をつけ、場を楽しむようになってきました」(本間由紀先生)

生徒の意思を引き出す探究で コミュニケーション力を発揮

もう一つのポイントは、探究活動のリニューアルだ。以前の探究プログラムは、地域と連携して地域課題の解決策を考える“Need型”だった。しかし、「生徒の意欲を喚起することはできず“やらされ探究”になっていた」と保坂先生。「生徒にとって楽しい探究にしたい」と、これまでの地域との関係性は活かしつつ、生徒のやりたいことから出発する“Will型”へ内容を一新した。

1学年でのインタビューやファシリテーションなどのスキル学習と、そのスキルを実際に地域に出て使ってみる活動を経て、2・3学年では生徒がやりたいと思ったことをテーマにする「マイプロジェクト」に取り組む。例えば、「おいしいシュークリームを作りたい」と地域の洋菓子店に教えを請い文化祭で提供したり、赤ちゃんを泣き止ませる楽器の音色に興味をもち保育園で実験を行ったり、さまざまなプロジェクトが誕生。学んだスキルを活かして、地域と対話しながら進めていく活動を、教員とメン

ター役の県内5大学の学生が支援する。

「生徒がやりたいということは否定しない方針です。もちろん実現困難なこともあります。やりながら方法を探していけばいい」(横堀先生)

生徒は自身の想いや考えを教員に肯定されることで背中を押され、地域に飛び出し、やりたいことの実現のために必要な他者とつながり、関わっていく。そのなかで大きく成長する生徒もいる。積極的に人前に入るタイプではなかったある生徒は、「文化祭を盛り上げたい」と県内で活躍中のリーダーを招くプロジェクトに取り組んだ。同校後援会の総会でプレゼンテーションを行って費用を調達



小学校での読み聞かせ。小学生の純粋な反応に「嬉しかった」「練習したかった」と生徒たち。



トークフォークダンスでは生徒と大人がペアになり、ファシリテーターが出すテーマについて、1分程度の「話す」「聞く」を交互に行う。それを、相手を替え繰り返す。

し、交渉・調整も行い企画を実現させた。

「実現までにはいくつも障害があったが、いろんな先生たちが陰日向となり応援した。本人は何度も諦めそうになりながら、それを乗り越え、最後までやり遂げることができた」(横堀先生)

＼ 生徒インタビュー /



左：本間 秀さん(3年生)、
右：平田美里さん(3年生)

相手が大人でも自然体で話す

自分は人と話すことが好きで、地域の方とのプロジェクト活動にも楽しく取り組んできました。話すときは、相手が誰であっても、嫌な気持ちにさせないことと、自然体で接することを心掛けています。言いにくいことは言い方を工夫し、必要なら「すみません、無理です」とはっきり伝えるようにしています。卒業後は電気工事を行う会社への就職が決まっています。仕事ではお客さんとの会話が大事になるので、高校で培ったコミュニケーション力を活かして働いていきたいと思います。(本間さん)

相手を理解しようと話を聞くことを大切に

私は元々、人と関わることに少し抵抗感があったのですが、高校で学校外のいろんな年齢の人と接する活動が増えて、それを楽しいと思うようになりました。特に印象に残っているのは、小学校での読み聞かせ活動です。子どもたちの反応に元気をもらい、もっと関わってみたいなどと教育関係の仕事に興味が湧きました。コミュニケーションでは、相手を理解しようという姿勢で話に耳を傾けることが大切だと思っています。子どもを表面的に判断するのではなく、それぞれの良さを理解しようとする、そんな小学校の先生になりたいです。(平田さん)

生徒が自ら学校外に出ていき、多様な人の協力を得ながら成長する姿が、教員の意識も変えていく。

「生徒が自由に地域で活動することに、心配性の私としては、少し怖さもありました。しかし、思った以上に楽しそうに力を発揮する様子に、『こんなことができるんだ』と気づかされます」(本間先生)

そのなかで、生徒たちは自分なりのコミュニケーション力を発揮している。企業から転職し、今年度から同校に勤務する中川千恵先生は、「上司の顔色を見て上手に話す人が有能な社会人だとは思わない。この学校の生徒の、時には嫌なことは嫌と意思表示できる素直さは、大きな強み。連携する側にとっては非常に対応しやすいのではないかと話す。

横堀先生は、生徒の表情の明るさに3年間の成果を実感している。

「過去の蓄積の上に、地域からの応援と生徒自身の意欲がつながり、学校が元気になった。今後も取組のブラッシュアップを図っていきたい」(横堀先生)

実践のヒント

- 教員が生徒のやりたいことを否定せず、生徒のWillから始まる探究活動で、苦手なことにも挑戦しようとする動機づけを行う。
- コミュニケーションのスキル学習や、一対一のトークフォークダンスから始めるという、小さなステップを設定する。
- 地域の大人や大学生、小中学生、他校の高校生、校内の先輩・後輩など、年齢も立場も多様な人との接点をつくる。
- 地域探究、各種コンテストなどで、人と関わることや人前に出る場数を踏ませる。

CASE 2

演劇を通して未知と出会い、 異なる他者と対話し、協働する

海城中学高校
(東京・私立)

1891年創立／普通科／生徒数1954人(男子)。海軍予備校として創立され、1900年に海城学校に改称。創立の理念を受け継ぎ、「新しい紳士」の育成を目指す。

スピード・効率重視の今こそ、 時間のかかる対話で合意形成を

海城中学高校では、「対話的なコミュニケーション能力」と「コラボレーション能力」を「新しい人間力」と位置づけ、その育成に取り組んできた。なかでも特徴的なのが、演劇ワークショップ（以下、WS）を各学年で実施していることだ。体験学習推進委員会委員長・国語科主任の中村陽一先生は次のように話す。

「価値観が多様化した現代社会において、互いの違いを前提としながら意思疎通をはかることや、価値観の異なる他者と協働して問題を解決することはますます重要になっています。そうした力の育成に適しているのが演劇WSです。例えば、演劇WSの中で生徒たちは互いの異なるアイデアを擦り合わせながら、観客に伝わる表現を目指し工夫して作品を創作していきます。観客に届く表現に一つの正解があるわけではなく、生徒たちは他者と対話し協働しながら決まった答えのない課題を創造的に解決していきます。その体験を通して対話的なコミュニケーション能力やコラボレーション能力を学ぶことが期待されます」

演劇WSは第一線で活躍している演劇のプロをファシリテーターに迎えて実施している。プロに



体験学習推進委員会委員長・
国語科主任中村陽一先生

任せるのではなく、ワークショップデザイナーの資格をもつ中村先生や他の教員が協働してオリジナルのプログラムを創っているのが特徴だ。

中学1年次には、学校内で過ごす時間や登下校などの時間を、互いが安心して快適に生活するためには、どのように他者と関われば良いのかを体験的に学ぶ「安全WS」を実施。年3回行い、例えば初回は、無意識のうちに他者に不快感を与えるシーンを演じた劇と、無意識のうちに自分たちが騒がしくしてしまうシチュエーションとを比較し、無意識を意識化していく。中学2年次には、これまでに出会ったことのない大人の話聞き、その話を基に自分たちで劇を創り演じる「聞き書きWS」、さらに中学3年次には、修学旅行の思い出を演劇にする「修学旅行WS」を実施している。いずれもグループで取り組み、生徒たちは意見を擦り合わせながら1本2～3分の台本を創り、全員が演者となり舞台に立つ。

「演劇を創る過程で対話は不可欠です。対話による合意形成は時間がかかる面倒なものですが、タイパ・コスパが求められがちな今の時代だからこそ、仲間とじっくり対話し協働する経験をしてもらいたいです。グループで創作した作品を発表した時に、観客から笑ってもらったり拍手をもらったりすると、生徒たちは本当に嬉しそうな顔をします。多様な価値観をもつ他者と粘り強く対話をして創

り上げた作品が観客に伝わったことが嬉しいのでしょ。その経験は、今後他者に向けて何かを表現しようとする際のモチベーションにつながると思います」

無意識のうちに排除されがちな 未知との出会いを演出する

さらに、高校1年次にはキャリア教育の一環とし



高校1年次のワークショップの様子。100分×2回の授業で、架空の職業を演劇に仕立て上げる。



仲間と話し合いを重ねながらストーリーを創っていく。その過程では、意見の相違や壁にぶつかることも。

て、架空の職業の人材を募集するCMを演劇にして発表するWSを実施。時間管理人、三色巻紙配達人、ひらめきランプ交換人など、与えられた架空の職業について考える。「既存の職業は調べれば情報が出てきますが、架空の職業については自分の頭で考えなくてはなりません。具体的な仕事内容、利益の生み出し方、やりがいなどを考えることが、自分の職業に対する考え方や大切にしている価値観などに気づききっかけになっているようです」と中村先生は言う。

集大成となる高校2年次には、沖縄への修学旅行のなかで演劇のWSを行う。「修学旅行を、未知との出会いがある有意義なものにしたい。沖縄で生きる人の生の声を生徒に届けたい」という思いから、同校の教員と現地の劇団員たちが一緒に考案したプログラムを実施している。沖縄の人に「わったーシマ(わたしの地域)」への愛を語ってもらい、生徒たちはその魅力を伝えるCMを創る、とい

う建て付けた。

「既存のイメージとは異なる沖縄について知ってほしい」と中村先生は言う。

「今の時代は、インターネットのアルゴリズムによって、自分の好みに合った情報や自分の関心事に近い情報ばかりが入ってきます。無意識のうちに、自分とは異なる意見や考え方、知らないものに触れる機会がなくなり、世界が狭くなっていることに危機感を覚えています。未知と遭遇する場面、異なる他者と出会う場面を設けることが、学校教育においても重要だと感じています」

偶然性・ランダムネスを設計し、生徒に任せ、生徒を待つ

10年以上にわたり、体験学習の設計・推進に取り組んできた中村先生。演劇という手法を取り入れる意義について、次のように語る。

「違いを尊重しよう、互いを認め合おう、対話を通



地元の劇団員の協力を得て行われる沖縄での演劇ワークショップの様子。生徒たちは半日間で「わったーシマ」の魅力聞き出し、CM仕立ての演劇を創り上げる。

してコミュニケーションをとろう…と教員が言葉にするだけでは、生徒には届かないでしょう。大切なのは生徒が自分で気づくことであり、その手法として演劇はとても有効です。楽しみながら、自分で考えながら、そして身体を使いながら活動するプロセス

＼ 生徒インタビュー /



左：中谷蒼介さん
(高校1年生)、
右：松尾治輝さん
(高校1年生)

わかり合えないなかで 共通点を見出すのが面白い

私は模擬国連に参加しているのですが、わかり合えないなかで共通点を見出し、意見を擦り合わせてかたちにしていくプロセスは、まさに演劇と共通しています。また、演劇での学びを活かして、模擬国連や部活などの場でも意見を出しやすい雰囲気づくりを大事にしています。演劇のワークショップではランダムにグループが組まれます。普段あまり話したことのないクラスメイトと意見を交わし合い演劇を創るなかで、お互いの知らなかった一面や意外な一面が見えるのも面白いところです。(中谷さん)

キャラを変えることへの 抵抗感がなくなった

最初は演じるのが恥ずかしく、自分のキャラを脱いで役に入り込むことに難しさを感じていました。しかし、次第に慣れて人前で演じる度胸がつき、声も張れるようになり、キャラが変わることへの抵抗感もなくなりました。演劇創りの場では、自分をオープンにすることになるので、お互いのことがよくわかり、仲が深まります。相手と話をする際には、まずは相手の意見を受け入れてから自分の意見を提示することも意識するようになりました。(松尾さん)

スを通して、それぞれの気づきや学びを得ることができからです。WSをデザインする際には、偶然性やランダムネスを設計するよう意識しています。そんな偶発的な経験から生徒が自発的に多くの気づきを得るためには、生徒に任せ、生徒を待つことが大切です。教員が言語化してしまうと、そこで生徒の思考は止まってしまう。あえて言わない。迷ったら、待つ。これは普段の関わりにおいても大事なことだと思います」

今年の夏休みには、初めての取組として、他校の生徒も交えた「サマーワークショップ」を実施した。中学2年生から高校2年生まで、性別も年齢も異なる多様な生徒が集い、共に朗読劇に取り組んだ。中村先生は「今後も異なる価値観をもった他者と出会い、対話をする機会をより多く設けていきたい」と締めくくった。

実践のヒント

- 身体的に学び、自ら気づかせるために、体験学習(演劇)を取り入れる。
- タイパ・コスパ重視ではなし得ない合意形成を体験するために、時間をかけて仲間と対話・協働する場を設ける。
- 未知との遭遇、異なる他者との出会いを通して、「違う」を体感させる。
- 偶然性やランダムネスを設計し、想定外の学びを誘発する。
- 思考を止めないため、生徒に任せ、待つ(教員が言語化しすぎない)。

CASE 3

生徒・教員がコミュニケーションのあり方を再認識し、安心して学べる環境をつくる

天草高校倉岳校
(熊本・県立)

1952年創立／普通科／生徒数25人(男子9人・女子16人)。校舎の目の前に海が広がり、マリンフェスタをはじめとした学校行事や地域交流、ボランティア活動も盛ん。

「学びのUD化」で 多様な生徒の学びを支える

天草高校の分校である倉岳校。少人数の学習環境を活かし、生徒一人ひとりに応じた指導・支援を行っている。同校は熊本県教育委員会より「高等学校における『学びのユニバーサルデザイン』構築事業」のモデル校指定を受け、2019年8月から2021年3月まで、「学びのユニバーサルデザイン(以下、UD)化」に取り組んだ。

学びのUD化とは、すべての生徒が安心して学べる教育環境を整備する取組のこと。「授業づくり」「環境づくり」「人間関係づくり」の3つの観点から、安心できる人間関係や環境のなかでわかりやすい授業が行われる、という学びのあり方を目指す。その根底にあるのが、生徒同士や生徒と教員とのコミュニケーション環境の再構築。生徒のみならず、教員のコミュニケーションの変容を促すことを意図しているのが特徴だ。取組の背景について、学びのUD推進委員会委員で教務主任の福田英昭先生は、次のように話す。

「本校には、特別な教育的支援や配慮が必要な生徒や中学時代に学校に通えなかった生徒など、学力差も含めて多様な生徒がいます。そうしたなか、人と関係性を構築するのが難しい、教員の指示が



学びのUD推進委員会委員の福田英昭先生(右)、同・川上朝陽先生(左)。

伝わりにくい、ペアワークが成立しない、その結果として学力が定着しない…といったケースが一部で見受けられ、課題になっていました。特別な支援の必要の有無に限らず、すべての生徒が安心して学べる環境を整え、主体的・対話的で深い学びを実現するためにも、“伝える・伝わる”をなんとかしたいという思いから、学びのUD化の取組が始まりました」

学びのUD化の指針となる 生徒編・教員編「マナスタ」

同校では、学びのUD推進委員会を中心に検討を重ね、倉岳校版学びのスタンダード「マナスタ」を生徒編・教員編の2種類作成した。授業づくり・環境づくり・人間関係づくりの枠組で、生徒編は19項目、教師編は28項目からなり、チェックリストもついている(45ページ^図)。内容を部分的に更

新しつつ、現在も全生徒・教員に配付しており、年2回、振り返りの機会を設けている。

「マナスタでは、生徒、教員、それぞれに意識してほしいことを挙げています。当たり前に見えることや基礎・基本も含めて言語化したもので、一つひとつは難しいことはありません。でも、私自身もそうですが、日々の学校生活のなかでは、つい忘れてしまうこともあります。折に触れて項目を目にすることで改めて大事なことを認識し、実践するようになると思うんです。その点で、マナスタの存在は大きいと感じています」

マナスタに基づき、授業や環境については、具体的なアクションとしてUD化が進んでいる。例えば、授業の冒頭でその回の目標や流れ・時間配分を提示する、振り返りの時間を設ける、指示は一度に一つだけ出す（複数出すと混乱してしまう生徒がいるため）、プリントなどにはUDフォントを使用する、掃除などの作業手順を明示する…といったこ

とだ。福田先生自身も、生徒の目線に立って、授業の進め方を意識するようになったと言う。

「以前は目標や流れを提示せず、時間配分も適宜という感じでした。授業のやり方を変えたことで、生徒からも何をどこまでやるかが明確になってわかりやすくなったと言われましたし、私自身、タイムマネジメントの意識が生まれました。生徒への指示出しについても、どうしたら伝わるかを意識するようになり、同様の声は教員から多く寄せられています」

ワークショップを通して、 自分ならどうするかを考える

人間関係づくりについては、年2回、全校生徒を集めてワークショップを開催している。例えば、今年度の前期は「自己表現のしかたを理解しよう」と題して、相手も自分も尊重しながら自分の意見や要望を伝えるアサーティブ・コミュニケーションを扱った。具体例を通してアサーティブな表現を学び、



人間関係づくりのワークショップの様子。ワークシートを使い、具体的なシチュエーションを想定して「自分ならどうするか」を深めていく。

あるシチュエーションにおいて「こんなとき自分ならどう表現するか」を考え、学年混合のグループで共有する。ワークショップを担当する、学びのUD推進委員で養護助教諭・特別支援教育コーディネーターの川上朝陽先生は、次のように話す。

「扱うテーマは、傾聴、自己表現、アンガーマネジメ

ント、断り方など、その年の生徒の状況や課題に合わせて選んでいます。SNSでのコミュニケーションに課題を感じていた年には、SNSのグループトークでのやりとりを題材に、読んだ人がどう感じるか、自分ならどのように返信するかなどを話し合いました。どう伝えれば相手が嫌な気持ちにならないか、空気

☒ 「マナスタ(教師編)」チェックリストの項目例 (一部抜粋)

ダウンロード可

【授業づくり】

- 導入では生徒に本時の目標を提示している。
- 授業の流れと時間配分を黒板左側に提示し、生徒が見通しを持ちやすくするとともに集中力に配慮した授業構成を行っている。
- まとめでは本時の目標に沿って振り返りを行い、生徒自身が意識の変化を振り返ることができるようにしている。
- 板書でのチョークの色使いを明確に分け、その意味を伝えている。

【環境づくり】

- 一つの指示に対して一つの行動ができるよう指示している。
- 否定、命令、禁止の言葉ではなく、肯定的で次の行動につながる言葉かけをしている。
- 教室前面は、必要なもののみを掲示している。
- 学年や発達段階に応じて、1日や1週間の予定を見やすく掲示するようにしている。
- 予定の変更は早めに伝え、視覚的に分かりやすく示している。

【人間関係づくり】

- 積極的に声をかけている。
- 些細な行動や、やって当たり前の仕事に対しても、お礼を言ったり褒めたりしている。
- 良い反応や考えを取り上げ、全体で共有している。
- 間違いや失敗は否定せず、受け止めている。
- 意見を述べたり調べたことを発表したりした後は、称賛や賛成の気持ちを込めて拍手をするよう促している。
- ペア学習、グループ学習等、学習の形態を工夫している。
- 他者の考えを否定せず、学び合える雰囲気をつくっている。
- 一人一人が活躍したり、認められたりする場をつくっている。

※生徒編・教師編の全編がダウンロードできます。

ダウンロード可

※ダウンロードサイト：リクルート進学総研 >> 刊行物 >> キャリアガイダンス (Vol.457)

を悪くしないかを気にする生徒が多く、コミュニケーションのヒントになればと思っています」

また、各学年のLHRなどで実施できるよう、人間関係づくりに役立つ各種プログラムと指導案を用意している。例えば1年生では、毎年4・5月に「サ

イコロトークキング」を実施。6つのトークテーマを用意し、順にサイコロを振って、出た目の数のテーマについて話をする、という活動だ。生徒同士が仲良くなるきっかけづくりに活用している。

学びのUD化の取組により、人間関係の部分でも「相手の気持ちを考えるのが苦手な子、思ったことをすぐに口に出してしまう子など、対人関係が苦手な子が少し成長したと思う」といった声が教員から寄せられており、「生徒や教員の意識づけになっている」と福田先生。今年度は、天草高校(本校)でも学びのUD化を推進する動きがあり、11月に行われた研修では福田先生が倉岳校の取組を紹介し、教科別のグループワークでは倉岳校の教員らがファシリテーターを務めた。一方、「校内研修が十分に行えていないのが課題」と福田先生。「マナスタも作成当時に比べると趣旨や方法論の共有が徹底できていない部分もあり、改めて力を入れ、倉岳校の特色として引き継いでいきたい」と締めくくった。

＼ 生徒インタビュー /



左：長尾華弥乃さん
(1年生)、
右：菊池美愛さん
(2年生)

普段は気にせず使っていた 言葉を振り返るきっかけに

全校生徒で取り組んだ人間関係づくりのワークショップでは、2・3年生と同じグループでした。こんなとき自分ならどう表現するかを考えて共有する際には、先輩たちから自分では思いつかないようないい意見が出ていてすごいなと思いました。そして、ワークを通して、普段はあまり深く考えずに言葉を発していたことに気づき、自分の発言が相手を傷つけていることもあるかもしれないと思いました。毎回、言葉を選んで話す余裕はないかもしれませんが、伝え方について考えるきっかけになって、よかったです。(長尾さん)

相手の感じ方を想像する 大切さと難しさを実感

マナスタや人間関係づくりのワークショップがあることで、「ああそうだった」と改めて立ち返ることができています。やはり、深く考えずにノリで言うってしまうこともあるので…。また、人とコミュニケーションをとるときには距離感を意識しています。一人ひとり感じ方や受け止め方は違うので、相手の状態を確認しつつ、こういうタイプなんだな…と察して合わせる感じです。でも、その「タイプ」は私の勝手な思い込みかもしれず、そこに難しさを感じています。(菊池さん)

実践のヒント

- 「授業・環境・人間関係」の3観点で心掛けるべきことを明文化。振り返りの機会を設け、再認識する。
- 人間関係づくりのワークショップを開催し、コミュニケーションのとり方を実践を通して学ぶ。
- 教員がコミュニケーションを学び、環境づくりに取り組む。

CASE 4

他者との関係性のなかで互いの変容を促す からだを使った「人を好きになる授業」

刈谷東高校
(愛知・県立)

1969年創立 / 昼間定時制課程・普通科 / 生徒数526人(男子245人・女子281人)
／兵藤先生が顧問を務める演劇部は高校演劇の全国大会に何度も出場している。

与えられた役割で 話し合いに参加してみる

刈谷東高校昼間定時制の3・4年次に、週2時間設置されている学校設定科目「リベラルアーツ国語」。ある日の授業を見学した。

最初に実施したのは、「役割を決めて話し合う」というワーク。4～5人のグループになり、じゃんけんで、積極的に意見を言う「イノベーター」、意見を調整する「調整役」、みんなを励ます「モチベーター」の役割を割り振る。提示されたテーマ「担任の先生を驚かせて喜ばせるのために何をする?」について、各自が役割を意識しながら話し合う――。

役割を設定するねらいについて、担当する兵藤友彦先生はこう話す。

「本校には、3つの役割いずれの経験もしてこなかった生徒がいます。人を不快にさせないよう忖度し、話し合いの場に息を殺して『そこにいるだけ』。『自分はこういう人だから』と諦めてきた。だから無理矢理にでも役割を試してみしてほしいのです。意外とできるかもしれないし、自分には合わないと感じるかもしれないが、やってみることが大切です。人はいろんな顔を使い分けて生きていく。その引き出しを増やしてほしいと思っています」

授業の後半は、各グループに「かぐや姫」や「浦



「リベラルアーツ国語」を開発した兵藤友彦先生。全国各地での出前授業も実施している。

島太郎」などの昔話が指定され、1分半の即興劇をつくった。ストーリーがあやふやな部分は情報端末で調べて補い、セリフや配役は自分たちで話し合っで決める。制作と練習に与えられた時間は30分程度。動きが止まっているグループは見当たらない。最後はグループごとに劇を披露。全身を使って役を演じる生徒たちに、緊張感や固さはあまり見られない。独自にアレンジした展開やセリフに、観覧者からどっと笑い声上がることもしばしばだった――。

「ストーリーや演技ではなく、答えのない問いに向かってみんなでつくるプロセスに意味があります」
(兵藤先生、以下同)

まず、意識の向きを 他者へ向けることから

同校の生徒は6～7割が不登校経験者で、外国籍の生徒も多い。「人が怖い、人目が怖いと言う生徒たちが、1年間の授業を通じて、人を好きに

なることができれば大きな前進になるのではないか」。その思いで兵藤先生が実施している「リベラルアーツ国語」は、「聞く・話す・間をつくる」という3つの領域を学ぶ授業だ。

「『間をつくる』とは、人と人が単なる情報を送受信することではなく、別の考えをもった人同士がジャズセッションのように共振するようになるイメージです。

生徒たちは社会に出たら、多様な人と協働していくことが求められます。学校は今、そんな社会とのギャップを埋めていく取組をしていく必要があります」

兵藤先生は顧問として同校演劇部を何度も全国大会に導くなかで、演劇レッスンが生徒の行動変容を促すことを確信した。そこから、「演劇のプロがいなくても教員ができる、演劇を用いた授業」を目



授業前半、役割を決めた話し合い。この日話した「担任の先生を驚かせて喜ばせる」というアイデアは、後日クラスみんなで実行する予定。



授業後半の即興劇の発表。発表時間が余ると「あと10秒ある。つなげて」と兵藤先生。生徒はアドリブで演技を続けた。

指し、生徒の成長を促した演劇レッスンを編み直して「演劇表現」という選択科目を作った。さらに多くの生徒に提供するため、昨年度、必修科目として「リベラルアーツ国語」をつくり、兵藤先生は毎時間指導案をつくり国語科の教員5人と実施している。

1学期のテーマは一人ひとりの関係をつくること。2人1組で、お互いの指先で箸を挟む、背中合わせで立ち上がるなど、からだを使ったワークを行う(図)。「自分に集中的に興味に向いている生徒も多いので、まず意識の向きをクルッと変え、他者を発見することが必要。言葉によるコミュニケーションスキルの前に、からだを使って他者を感じ取ることから始めるのが特徴です」

2学期はグループでのやりとりを練習する。即興演劇のレッスンから始め、短い芝居の創作にも挑戦する(図)。

「即興は相手を見ないとできないものです。他のグループの芝居を見て、自分たちの芝居を臨機応変に調整するようなことにも挑戦します」

そして3学期は「一人」になって、本や言葉と出会う。最後は、日常生活を基に「私」を1分間のパフォーマンスにする。

「表現にはその人が出ます。それを共有することで、『困難を抱えているのは自分だけではない』とお互いに共感することが大切です」

人と話す楽しさが 経験できる授業を

生徒は「リベラルアーツ国語」について「一番好きな授業」「楽しい」と口を揃える。4月の授業開始当初、相手を見ることや近寄ることに拒否感があり、簡単なレッスンもできない生徒が大勢いた。「こんなことができた」という小さな自信を積み重ね、話し合いや協働ができるようになってきた。

4月から授業を受けてきた生徒たちは、「授業でイノベーター役をやって得意だと気づき積極的に意見を出すようになった」「こだわりなく動けるようになった」「以前は誰かが決めてくれるのを待ってい

図 取り入れている演劇レッスンの例

● 箸を挟んで立つ(1学期)

2人が目を閉じて割り箸をお互いの人差し指で挟み、声かけや合図なしで落とさないように立ち上がったり、1人が箸の下をくぐるように回ったりする。

● ～代の娘とお母さん(2学期)

グループごとに決められた設定(10代の娘と母/20代の娘と母/40代の娘と母/60代の娘と母)で芝居を創作。発表直前に『4つの芝居をつなげて連続性のある物語にして』と注文をつける。生徒は前の発表の設定を引き継ぎ、その場で自分たちの芝居をアレンジしながら発表する。

生徒インタビュー /



左：斉藤愛華さん
(3年生)、
中央：荒木莉杏さん
(3年生)、
右：竹内惺羅さん
(3年生)

人間に興味湧き始めた

私は初対面でもすぐ話しかけるほうです。でも、以前は相手はどう思っているか考えようとしていなかった。よくしゃべっていても、相手がどういう人が全然知らなかった。もっと言うと、自分が何を考えているかも意識してなく、目の前の出来事をただ見ているだけだったのかもしれない。この学校で「聞く」ことを覚え、人間というものに興味湧き始めました。「リベラルアーツ国語」を通じてクラスの関係性がぐんと良くなり、今は誰とでもなんでも言い合えるという安心感があります。(竹内さん)

自分の気持ちを言葉にするように

学校そのものが怖いという状態でこの学校に入学し、がんばっている人々と関わるようになって、今はすごく楽しいです。最近、自分の気持ちを言葉にして伝えることが多くなったように思います。中学の時は思うように学校に通えずふさぎ込むことが多く、家族にも自分の思いをあまり言えずにいました。それで苦しくなって、ある日突然爆発しちゃみたいなきっかけがありました。今は、良いことも悪いことも言語化して家族に伝えています。溜め込むこともなくなり、すごく気が楽になりました。(荒木さん)

相手をもっと知りたい

中学時代に友達のつくり方がわからなくなっていました。でも、高校で目が合ったことがきっかけで友達ができ、相手の話を聞くことの大事さや、違うと思ったことははっきり言ったほうが良いことがわかってきました。コミュニケーションとは「相手を知ること」かなと思います。今、クラスの3分の1が外国籍の子で、お互いの言語を教え合ったり、自国の料理を持ってきてみんなで食べたりするのがすごく楽しいんです。相手の言葉を理解したい、もっと話せるようになりたいと思っています。(斉藤さん)

た。今は自分のやることは自分で決めて動くことが増えた」など、それぞれ自身の変化を感じている。

「まず生徒と私、次に生徒同士の信頼関係をつくる。そのなかでのやりとりで、生徒がお互いに変わってくる。目指すのは行動の変容で、内面を変えろとは決して言いません。しかし、関係性のなかで自然と内面も変わってくるものです」

こうした実践を踏まえ、ほかの高校や大学でも出前授業を実施している兵藤先生は、「このような授業が必要なのは本校の生徒だけではない」と言う。

「今、『話す』とはオンライン上のメッセージ交換のことで、対面で話すことは『リアルに話す』と言い、オンラインで『話す』ほうが気が楽なのだ、大学生たちも言っていました。そんな世界に生きているのか、と驚きました。どうすれば『リアルに話す』ようになるかと聞くと、『楽しければ』と。それなら授業でリアルに話して、たくさん楽しい経験ができるようにすればいいのではないかと。多くの若者にそんな経験ができる授業を行っていきたいと思います」

実践のヒント

- 言葉を使ったスキルの前に、からだを使ったコミュニケーションを練習。それを楽しいと感じられるようにする。
- 一対一の関係性づくりから始め、数人のグループへと徐々に対象を広げ、最後は「自分」に向き合う。
- 教員との間の信頼関係が、コミュニケーションを学んでいくベースになる。

＼ まだある！ ／ 実践のヒント

取材では生徒たちの今を見つめ、それぞれに工夫を凝らす先生方の取組と同時に高校生たちにもコミュニケーションについての考えを聞いてきました。最後に、目の前の生徒に対し、小さく始められる実践を紹介します。

先生への インタビューで練習

場面

総合的な探究の時間／部活動

●総合的な探究の時間では、さまざまな大人と対話ができる企画をしました。スモールステップで聞く力や質問力を育成するため、まずはインタビュー手法について学び、先生方を相手にしたインタビュー練習をしました。また、部活動では自分たちの目的や目標を設定する話し合いを通して、どのように先生方に関わってもらうかを考えさせました。(群馬県立尾瀬高校／田崎 潤先生)

集団討論の場で 教師はじっと我慢

場面

進路指導

●面接指導やグループディスカッション指導が必要になるタイミングで、集団討論の場を設けていました。「誰かの発言を否定しない」「おへそを話し手の方に向けてうなずきながら聴く」等のルールを設けて、話しやすい雰囲気づくりを工夫しました。話が止まると、ついヒントを出したりして促したくなるのですが、じっと我慢することも大切だと学びました。生徒は話す材料はちゃんともっている。うまく話す機会を用意できていないだけ、と実感することが多かったです。(京都府／匿名)

年間を通して 多様なチームで協働

場面

教科の授業

●地歴科&公民科の授業で単元ごとにチームを編成し直し、年間を通して多様なチームでディスカッションしたり、作品制作をしています。チームのチーフに権限委譲をし、子どもたちの意志決定や合意形成過程を重視しながら授業を展開しています。多様なチームで活動するので、年間の振り返りでは「学級全体のチーム力が上がった」とか、「話し合うことが当たり前になった」と感じている生徒が増えました。(宮崎・私立・宮崎第一中学高校／猪野 滋先生)

ピアカウンセリングの トレーニング

場面

任意参加の「土曜講座」

●希望者を対象に「中大式ピアカウンセリング」の手法を取り入れ、自己理解や傾聴のトレーニングを行っています。ピアカウンセリングとは、心理的な援助のため仲間の話をきくこと。トレーニングによって相談に乗るための大切な要素が向上する可能性が研究によって示されています。参考：横湯園子・編『ピアカウンセラー養成プログラム—自分がわかり、人の話がきける生徒に』かもがわ出版(2010年)。(東京・私立・中央大学杉並高校／大館瑞城先生)

ゲームのルールを自分たちで考える

場面
人権教育

●「仲間外れをつくらない仲間づくり」を実践しています。例えばピンポンパンゲームをした後に、「車椅子の生徒がいたらどういうルールが必要ですか」と問い、生徒たちが追加のルールを作成して実際にゲームをします。コミュニケーションはルールがあることで成立しますが、ルールは逆に仲間外れを生み出します。そうならないように生徒たちにルールをつくらせていく実践は、通常の授業でのグループワークなど、日々の活動にフィードバックされていると感じています。(奈良・私立・智辯学園奈良カレッジ中学部高等部／松本和志先生)

編集協力委員の先生方に聞いた 「高校生の今」

この10年で見れば、中学校での学習の変化もあり、高校入学時点でペアワークやグループワークなどの活動に拒否感や忌避感を示す生徒が大きく減少している実感がある

(大阪府立桜塚高校・田上 浩先生)

少人数クラス等、発言しやすい雰囲気のなかでは、自己表現をしやすいように感じています

(千葉県立大原高校／宮澤 勝先生)

人とのつながりや対話の機会が不足している影響か、自分が考えていることをうまく整理し、他者に伝えることが難しいと感じている生徒が多い印象を受けている

(北海道立北海道標茶高校・今野翔介先生)

デジタルネイティブなSNS世代に加え、多感な小学校高学年から中学生の時期をコロナの制限下にすごした高校生のコミュニケーション感覚は、極めて個人差が大きく、多様という言葉でくるしかなく、とまどいを感じています

(大阪府立桜塚高校・田上 浩先生)

＼ こんな支援も /

演劇の専門家を派遣する文化庁事業

●公募型で、採択されれば文化芸術団体または個人・少人数の芸術家を派遣する事業。芸術鑑賞や体験の機会だけでなく、複数回の計画的・継続的なワークショップを実施することもできます。(編集部)



文化庁「学校における文化芸術鑑賞・体験推進事業」

<https://www.bunka.go.jp/seisaku/geijutsubunka/shinshin/kodomo/>

高校生が考える 「コミュニケーションとは」

自分と相手との共通点と相違点を丁寧に探し、見つけ出すこと

(海城高校・中谷さん)

この人と一緒にやりたいと思ってもらえるよう、相手の気持ちをつかむこと

(海城高校・松尾さん)

楽しくしゃべれること

(刈谷東高校・荒木さん)

相手を知ること。知れるとすごく楽しい!

(刈谷東高校・斉藤さん)

自分から話しかけたり、自分のことを相手に話すこと

(刈谷東高校・竹内さん)

話すことだけだと思ってました

(天草高校倉岳校・菊池さん)

一人ひとり違う、相手の距離感に合わせること

(天草高校倉岳校・長尾さん)

相手を知ろうとすること

(中条高校・平田さん)

相手がどう思うか考えています

(中条高校・本間さん)